

頭書古今和歌集遠鏡

五

和書門				
類	號	函	架	冊
一	二	三	八	八
八	二	〇	〇	〇
二	一	五	〇	〇

庫文		冊函	
内閣文庫			
番號	和	18215	
冊數	8	( 5 )	
函號	200	11	



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり





と云ふ事ありて  
すゝもよき事  
子下よき事  
婚あり

ヲエヌ目カラホル涙チヤイ

ス

おまち

おろろの涙を袖にぬぐひておぼろげに  
あざむきあすなづきつらむ

○口ガ涙ハ冬ツチコツチヤイトウモセキトメラレヌホド流

レテ瀧ノ水ガヤスヤオスソノ袖ニヌヌ玉トス元クラ

井ノ涙ハオロカナイ

寛平治時さまの宮此言のうらみ

後系うらみの朝臣

意こびてうらみ申お初るもあまのたがひウツクぬきし形ん

古十一二

○心ニモクモアハセズ意アグデスコレ子ウタ多ク通カコウ

スル夢ノスグミナトゾホニイテアヒカシ夢テコソツト通

ル直道カミチナレホニニソチハ及ヒモナイフイツモ意ワビテ

居ル中ガヤモ 中々ふんの中へ怒るを材料

神カミノ申ウタをウタハハカバズウタありウタふウタあめウタやウタふ

ココろあふん

すゝの江津ウツふも波もよそや夢の通縁人ウツのよウツらん

○昼ホニニカヨフ乃テ人目ラハカルモソノズイチヤカ一二

夜ハ夢ニ通カコフハカル乃テ人目ラハカルテヨケルヤウニ

二六世のころと  
ふいふのうらみ  
あつた万葉集の  
うらみとあつた  
とあり

ほろろのうらみ  
まじりすゝのうらみ

きつのもち...  
ひのき...  
えん

ルハドウシタコトギヤヤラ

よのよのま

○口が煮ハ山チクニカクシテアル草ガカシテ  
ガサルケドモ サウエフヲ知テクル人がナイ

まじりもの

よへのまもろくく足ゆる交中のまひまねる煮ますり

○アノヤウニ夏虫ノ火ヲトカソトモフテ飛入テ  
タスツル命ヲシラテケル人 キツイアノナフチヤド

オナラミ

まじりもの

万葉大勝異跡  
おの字とけとよ  
てしなま

ガワシヤ此ヤウニシテヒタルト必ズテ煮ニ身ラシムルア  
夏虫ノ火ニヨウヨリハナホサテサモクノアヤウナリカチ  
終材よひのまじりもの

○毎日夕方ニバ 燐ヲモホフ大必ガモ元ヲド  
ヤウニモ元必ヒ 燐ヲモホフ大必ガモ元ヲド

トイカシラヌ 光リカツテ又タナラヨモヤカウシナヌアル  
イフガヤワサ

さこのまめおく 煮ゆりも 燐ヲモホフ大必ガモ元ヲド

おの字とけとよ  
てしなま

上を承りしとて  
新機方製子まの  
うきわすおの  
消うててもある  
のあふあふと冬  
のあふあふと

○サノ葉へフツタ霜ハキツクサ九モノチヤガソヨリヒトリ子

ルロガ袖ガサナホキツクサエテ寒イワイノ

ワカ病の美のうきわすおのきえうててぞあふなる

○上イヤモウキツクキエルヤウキエテイワイノ

餅材おたそまきえうての尻ろくすまうてきうて

あふうりきうてふ款まかまのれうて其あーま

さうの刊今世の程ふもあえうてひえうてまどお

くうて白くてもあるをや

河の原まきびくも藻のみうれてふまうれぬあまか

上右は十四

○川ノ瀬ノ底ニハエテヒイテアル藻ノ水ニカクヒテニヌヤウニヌ

人ニシラレヌヌラロレハアスルノカナ

こぶのたがえぬ

うきうてやふ雪の上消まきえておあふうあまあう

○雪ノ下カラ消ルヤウニロレハハニスズニ此ゴロホニ消ルヤウニ

名ヒラアスルノカナ

後原おきぬ

君とあははのこおあぬれびをてつてさあありなる

○ミラツクシトモノハ海中ニ立テアルモダガワニ君ヲ意シ

こむつうとハ舟の  
うのふとを水尾  
とらをれは標の机  
とらとつハ助辞  
子て水尾抗え延亮  
式ニ難波津頭海

中ニ澤標土佐日記  
子ニてつづのゆ  
あり難波子つきて  
河尻子とあり

五のせつくりハまが  
一のあつふま  
り

ウ名フテ浮ク涙ガテウト海ノホトミチヤウニ床イッパイニ  
ミチタバソ床ニテ居ル口ガ身ハトニトソミヲウクシキ  
カクワイソシテソクヲツクシト名ノトホリニ身ヲツクシテ  
ニウテノケルテアラウ

ある命いきぬすところふゆのせつくりをんといふん  
○トウテ志デ死ヌル命ガ着ヒヨット生ヒルフモアルカ物ハ  
ニウテノケルテアラウ

ウトニテクレカシ  
己びぬれあひて忘れんとあふもあといふおをんたのめあふ

新撰万葉集ハコノ  
子ノミテ集ルモ  
もあつふま  
ガチヤク忘れ  
ありハ帖子ハ上乃  
向きたり同くト

トットモウ志ニギハレテタバドウシテリニは事ヲ忘レト  
必ハルマニ逢ウトスルフガアルヨツテ又ヒヨットアハルフモア  
ラウカトソカ教ミニハレテソシテアハレモセバア、夢ト云  
モノハサ人ニ教モシウ名ハセテオイテ何ヤクニタヌモムヤ  
おま子人ごのめと人ごのまれとあふハたがり人ごのま  
せとこそいふガキハ即チおせのつがまのこ

よのこ人あつぐす

○ナラコトヲリニヤウニアサテク子テモオキテモ志シイコ







ヌレタゲヤトイフ

こゝれれの羽長

おがひ直直おが  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

おがひくおやまーき附着のまきさうさくよくおがひく

○時鳥モオガヤウニモガカナライカイ時ニホナニ夜ハヒタモノ

アヤウニセ鳴ッヤラ

情のあき

さつき山指さうさくおがひくおがひくおがひくおがひく

○上 泣テツカリ居テウかくトテ心モソコテオアアアア

九の心はね

古上ノハ

おがひ直直おが  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

おがひ直直おが  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

おがひのさつき附着のまきさうさくよくおがひく

○おがひ直直おが  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

メオオエ

情のあき

おがひのさつき附着のまきさうさくよくおがひく

○おがひ直直おが  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

涙ヲガレテツカリサヲリテスワイ

鳥足みらの夜北奇合のあ

情のあき

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

百五十九

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

おぼろのうらな

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな  
おぼろのうらな

安きもの説に花あまはくをえん

たゞね

松風より手あはる琴の声あそぶるあく人のこゝろをさへん

○自身上りナラス琴の声秋風吹くやうな声三ツテかき

イサウチチナウ上レタコニテギキ此言ニ意ヲ入スドウシタ

コトギヤキ

○子松より自身上りキキとある。自身とつくと。あまをばんソコ  
ミウノコトハシラウウシク我をアハルバクキレすとツツク  
づゝあり。されどもその琴の音、あまをさると。さうさうあまを  
みよきて自身とつくとを添へる。あまをさうさうさうさう  
まう子見ます  
へうに

松林の音を  
しつてつれ  
りまはだ  
或抄より  
子松の字  
とすすともあり

ほろやき

おまこころの海は雨あはれづねのうとあやさるらるらこひ

○一雨がババウツトノウおせびい故ツチヨリモカクベツニ

意が二サレ

やまとお侍りるる人まつらるる

○このあまはるの群の山は松むひとづそおのこやまをさるるが

○ソチノ大和國ヘダヨエテイカヌウチハニタレトトモフ吉

野山ノ花ヲ人ハナレバカリウテクスヤウチモゴテ大和ニ

コナルオヘクヲワシガツチク意シウ名フモソトホリギヤ

此  
子松の字  
とすすともあり

おのせまの  
とすすともあり



上は海草といふ  
草あり

たまりせふぬぎ〜らぬらぬらまき草の葉を煮てはすの那

○早イ川ノ浪ニ九浮草ノ根モトノ底ヘツカズニウイテアルヤウニ

ワレウイタ志ヲアスルヲカナ

いそのみ

よしくぬぎてぬるうり衣かけて居るぬ附のまを〜

○上心ニカツテカタ時ノモルハヌフナイ

○子林云ぬぎ〜に  
かぬらぬらとてに

浮草ヨウニ衣を  
てこのぬ附やま  
ま人のつま〜ぬ  
かの〜中ふおと  
ひつてハ〜も  
がはぬる〜ら  
らぬらぬら

あはれの子やれ中山あうくお何〜う人をおひひるあけん

○アハレモセヌ人ヲ一ニエナカニナセニ此ヤウニワレハ名ヒソメタフヤラ

一古世ノ十二

あきまのハ冠草あり

あきたへの枕にちあはれと人せよあはれひする有る

○一枕上涙ノ海ナルケド志ニイ今見止ハサエヌフヤウイ

年と〜きまぬるひあり形が〜よれ袂をおとほりたう

○何年カキエニモ元名ヒスハアリチカラモ夜ル〜ンデモヤリ

袖ハナミガガ氷ルワイ名ヒスデトケサウナモノヤニ

つ〜ゆき

あきまのぬ山移子あ〜きふお〜んぞ〜び〜うららる

○ミラヌ山ヲコソニヨウモノナレワレガ志ハミラヌ山ヲデモナイニヤウ

ミヨウ心ハサツライナギナチヤウイ

あきまのハ冠草あり  
らぬらぬら  
のぬらぬら  
ひらぬらとあり

花集十八卷のひき  
にぬぐふありとあり

これおぬれやうまつあく後まを袂のこころをまきうりひき  
（声）下立法血涙ノ紅ハソル冬ニ袖ツガリガ色カスナイ  
ツキニ紅ア衣ヲ染ルムドモカモ同シヤウヨソ染ルモノナレ此ヤ  
立袖ガカリ染ルモノデナイニサ 初ニ句、夏の初子、うらな  
ぬのかり出でぞ船く。とあるをさき異に、このあかき  
紅とのうま用あり。やうが、紅とありおく、染ることを  
声をあげくおくるふうぬり。 袴材四の向此は  
白とと足々、後ち年か、はくううま、あぬさううひまう  
○始メホト、白去名、立ニ足ニ足涙モ、ダブト年か、ハニツカイニ

十五ノ十三

色ガカシタヤイ

こつぬ

夏中とゆるひらんううう、これおぬひふとをぬぐうあり  
○夏中ノ火中ハ、心カラヨモヤシテ、ヒウラエミ、カナイ  
オカナコト、ヤトハ、ナセニタフヤラ、夏中ガカリ、スナイオレモ、  
通りニ心カラ、ヒミヨラシテ、ケレ、アアラヤウニ、ハル、

こつぬ

風、おぬ、暮、ま、ら、る、る、あ、る、あ、る、の、た、え、て、つ、れ、ま、き、あ、ら、う、ら、う、

○上 さら、ハ、井、モ、ナイ、ケ、レ、カ、タ、モ、ツ、ヨ、イ、君、ガ、心、カ、ナ

上六序、ま、い、て、終、て  
つ、れ、ま、き、と、こ、ま、り





りふおきやうとこそ  
ハのあへのう射る  
さまんをうとらう  
ちのひまきまで引み  
せひきふまあち  
〜まごち〜あめ  
〜まごち〜あめ  
とあふうとまふ  
ま〜

手あめれで月日へはなるあうおきやうよあひておね

○弓ヲ久シク手モサズニオクシニ 必フ人又シテアハ夫 其入ノ

コトツカリあテ 夜ル字ナリオキナリテヨクモサチラレヌ

人老ルぬあひのミコトビ〜ルレウが歎きせよ家のミダ

○あフ人ニ知ラヌあホトサナキナニツタモノハナイ 此ワガ歎

ノズワゴツカリガサ知テ井テソシムフ人子カラシラヌヤ

こもけり

とゆあていおぬばうととミコト海志と子海ひてあうきおと

○ワガあハテウド 水無瀬川ノウベハ水ノナイヤウニ見テ下

古社ノ十五

ノカラ水ガトホツテ流レルヤウナキテ 討ダシテイハ又ト云カリ

ガヤンイ 心ハシヤウチウ名フスノトコロへ通リテあレイモノヲ

又ほね

あとのこゑひねまね〜あふれはうらぐんやう見つゝあひり

○オハフコツツカリヲあシテ上ヲ見テ又々多キハ逢リト見タ

ノモオハフナサデチイワガ心カラ見タノヤヤイ

たふね

命おもやさうてせ〜あふおハアオそあまのきひのさう

○イノチホド惜イおハナイヤガ ソレヨリマダ惜ウハルモム

あ集子わうおき  
どひ〜女のきく  
あ〜くああつあ  
このあまはえとて  
らでさあけりあ  
うとあうて せり

三あり

是の多と列ハ  
方本末のよ  
かの子ルハ  
とミコけて上ハ

慈レイ人三達ウト  
メルヤワイ

なるこの法き

あづさひらば本末  
○登ヨリモ

夜がサカクツニ  
ミコね

慈意ハやくへも  
○ワガ慈ハ

タトヘタイぶ  
ドコミト云カ

キリモナイヤ  
レメコブ

アウライキ  
これのミ

めきーろろ  
○世中

モハナイワイノ  
多々一度

ツナフデア  
二度ツ

ハチカヒナ  
ケバ

ホトカナ  
あつやぬ

あつやぬ

今乃や慈意子  
モウハヤ

ラゴ只慈死  
今乃や慈意子

彩掛方葉  
こひぬ天  
きんり  
ありとのみ

このおぼれ様子ひき  
しつひとつれまうつり  
なまなつれまうつり  
つりまらばありひ  
の初とて伊勢  
が返りあり二八批  
把左下仲平の  
の右位ひくき附の  
あかきおりの  
朝づくさき  
さんとありか  
うらまをちめよ  
業平と伊勢と府  
代子つべこの懸  
も伊せが集りて  
批把とて批把

及ぶ形怪と附て  
いふとてこの集  
子形怪とありて  
入ていふ不書  
ことおぼれ  
まのあはれ  
がう

トア<sup>レ</sup>カラ約束シテオイタ<sup>ラ</sup>ガアルヲ教ミシテサ<sup>レ</sup>バツ  
カリガ命<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>ガカウ生<sup>レ</sup>テ居ルワイノ

又のね

たのめ活あひで年あひつちひふらぬんと人ハあきかん  
○イク度<sup>ク</sup>カ<sup>ク</sup>逢<sup>レ</sup>ハト約束シテ教ミサセテオイタ<sup>ラ</sup>アズ  
何<sup>レ</sup>年カ多ツダシレ<sup>レ</sup>ニコリズニヤツ<sup>レ</sup>タクニニムフロガ心底  
源イ上ヨラ推量ニテク<sup>レ</sup>カシ

ごものつ

いぢちや何ぢら書れあぢおとあありふぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

合ガサ何<sup>レ</sup>ガヤツ<sup>レ</sup>イホニツ<sup>レ</sup>ヤウナアダナモ<sup>レ</sup>ガヤ<sup>レ</sup>モノ逢<sup>レ</sup>フニ  
カ<sup>レ</sup>テナラコノイチ<sup>ニ</sup>ニウ<sup>レ</sup>ハヲ<sup>レ</sup>イ<sup>レ</sup>フ<sup>レ</sup>ハナイ

頭書古今和言集を鏡表才十二

Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

頭書古今和歌集巻第十三

哀歌三

やまひのつこちありあひびふ人子このつひひく好  
ぬまのそわやうらふよきてつらけり

本系業平朝臣

おきもせぬもぞとありてはなりのおきくふあふくつ

○オキルデモナシ子ルデモナシニウツラクトシテ夜ヲアカシテ入又登  
ニバ此ゴク空<sup>ソラ</sup>ヲ立<sup>た</sup>ニ長雨<sup>ナガアメ</sup>ハ春モムテ一日ナガメテシキニ思フ  
クラスガヤ

わらわのらふきとふ  
子<sup>こ</sup>同<sup>どう</sup>く<sup>く</sup>助<sup>すけ</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>  
他<sup>た</sup>と<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>又<sup>また</sup>シ<sup>し</sup>の<sup>の</sup>玉<sup>たま</sup>  
と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>は  
も<sup>も</sup>用<sup>もち</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>り

これこそおとこを  
のあめをうねう

ありひらの初夜はあまのつらさのわとふまて

つらさ

そ初夜

ほくのあまのつらさる海川をぐのこめしてあまのつら

○ウチのイテ日ヨハハルシ月長シヒデサヒイウケテハイヨ

イヨシキテナガマシテ 海川の水ガミシテ 袖ガヌルツカリ

デシテリノホカセバ渡ラヌヤウニ逢ハサウチモヨウモナイ

うれ女ヲサウケテウケマアア

あまのつらの初夜

ほくの袖ひづらあまのつらさる海川をぐのこめしてあまのつら

よまのつらさる  
こまのつらさる

袖ガヌルトオツケルガシヤオハハ海川ガ浅ササササウテウチ

ンデツカリヌルツラ弁渡イフデハおミナリ一セヌ身ツガ

流ルトオツケルツラ井渡川ノ深サラソシテ頼ミ被ヒセツ

餘材オツケルツラ白れツラツ。身ガヌルツラツラツラツ

こひつらまのつらさる海川をぐのこめしてあまのつら

つら。

影くらげ

よまのつらさる

よまのつらさるつらさるつらさるつらさるつらさるつらさる

近ウヨルテスガサニ身ツカウシテ遠クオケテ居シ心ツラ



うれきやハ別な  
の上をこころ  
絶ずとてふ  
とまはる

足らぬまきや  
ミル  
海松ノ無イ浦  
テヒタモノ  
ハ知ラシ  
ウト  
初ニ  
ル  
ス  
ヤ

○海松ノ無イ浦  
テヒタモノ  
ハ知ラシ  
ウト  
初ニ  
ル  
ス  
ヤ

初ニ  
ル  
ス  
ヤ

浦  
の  
形

源宗千朝

今夜ハ  
カ  
ス  
ニ

今夜ハ  
カ  
ス  
ニ







あつたつてつてつて  
へーあつて  
つてつてつてつて  
まへつてつてつて  
へつてつてつてつて  
とつてつてつてつて  
つてつてつてつて  
つてつてつてつて  
つてつてつてつて

リモセズニ又トヤラ名ヲ多テラシヤガモハル世中ノナラビ  
ニクナキ入カアルテサ

ひびくの五條にうろふんとあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
うろあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

人あれぬが直ひびの周るまのくごあつてもあつてもあつても

くしあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

○人シラサ又オガ通ヒミチノ関野ノ番ハトウゾ毎夜ノヨロビニ  
テヨツトナリ庄チテカレソト多クソクニハイライニ

歌々々々 泣くまき

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
○ズイニカクシテケケキツシモモイハ六エヨラニ月ガ出テ  
ヨシエテニ此ヤシ出テサル早 又三ツの向ハツて出テ  
序のこまますぐ

あつてあつて

こゝろてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

わ所集事十八あひと  
あハトヨクミウホ  
あてハハヒミト  
ハののあ

○ハニハイ恋くテ冬くヨヨヒ始メテ逢フ冬ニドウ今夜八庭

鳥ニアナイテクシ子バヨイガ鳥がナクオキテ別レ子バナラヌニ

よのこまぢ

秋のねもあのみあうらうあやとやびとぞともあく明ぬる

○秋ノ夜ヲ長イモリヤトモモ名ガリヤワイ冬く恋イ人

テウ夜トイハゴカカウトモナニツイ早ウ明タモラ

ナシ秋ノ夜ガ長カラウツ

允何内ニあぬ

冬くともあひあてぬ昔よりあふんくの秋のねあまは

○秋ノ夜ハダイ長イモノヤケレアウ入ニヨツテ秋ノ夜デモ

ミジカウオホエ物ギヤト昔カラモラトホリテ此節ハ秋ノ夜

ノ長イ時節ナレヌイタ人ニ逢フ夜ギヤヨツテ長イレサ

ドウモあヒキタラヌ

よるんーん

あめあひあすのあ  
は言ふも明ぬる  
らのあ

あめあひあすのあけあはバおのがまぬぐあめあひあす

○目ガサメテ夜ガクワリツト明テクバツツテ子テ居タヌ

ノキルモガ別ニテロカレルガナシ

餘材まぬぐの詠いさうたふう面さうきまぬ

六帖子ハ五院大  
臣の言ハ五院大  
臣ハ時平のあり  
ゆゑハ時平と云  
きわむのまじり  
あり

きとといふは。子林云。結句。形原本。おきまらざるか  
きとわらざるか。うらまき。あまらば。あやうなる。す  
や。密勤子。又書写のおやまら。しやとの。まじり。まじり  
れ。と。あまらざる。と。云。

後原 國統朝臣

あまらざる。今ハの。心は。く。あまらざる。あまらざる。あまらざる。  
○夜ガアケトニテ サヤモウ別レルヤト心ガウカラニテトセ  
ニ此ヤニイフニハ又心ガソコトヤヤラ  
實年ハ附きまじりの言ハるるの事

ら 朝臣

二帖子ハ二帖子  
す。あまらざる。あまらざる。  
あまらざる。あまらざる。  
あまらざる。あまらざる。

あけぬ。と。あまらざる。あまらざる。あまらざる。あまらざる。  
○此ヤウニ而ガソウフルニ 夜ガ明タトニテ 別テ帰ル者デハ 涙  
モ雨ト内ジヤウニモラコキオロスヤウニヒタクト落テイヨク与  
タリトヌテ サヤモウカチテナギナフカナ

野 子

露

あまらざる。あまらざる。あまらざる。あまらざる。  
○目ガサメテ別レルカホリヲ并ニ 雞ヨリサキヘワガサニジ泣キ  
メ

六帖子ハ六帖子  
あまらざる。あまらざる。  
あまらざる。あまらざる。  
あまらざる。あまらざる。



昔年の伊勢子下向  
のゆいこゝろのり  
子なぐんせおき  
子いづれおのれ  
おんごをれおたり  
あつよりこころと  
兄す

テハホテ多事リ庄一イホド兄ヤト存ジテ 眠ツテミド子コレモ  
致サズバ多事ハエ見イデ サモイヨクハカナイコニナリルルル  
昔年朝度のいせれおきおきくくをるる時 疾風子  
おきくく人すいとこころふあひそく又のあゝと人や  
おきくくをあひとりくくわひびく女のこととより木  
ニセよりくろく よきんしす

○<sup>ヲ</sup>タへるハオニカワガガへお出サツタアツタヤラワガオニハ  
ノカへ系ツタアツタヤラ 又多テツタカホニニコアツタカ

昔年く世人と  
るいづれおのれ  
た

眠ツタテツタカ目サテ居ルウチコトアツタカドウアツタヤ  
ラツタナカラ覺<sup>ニ</sup>キセヌオニハトツタヤナ  
ス  
あつむくの朝度  
かきくくするんのおきくくおきくく世人と  
○サイナラバハイツ心ガクカツテ 闇夜ニライクヤツテド  
アツタヤラワロモカ向オホキセヌ多テツタカホニテアツタヤ  
ハハ世々入定メテトイ  
影くらげ よきんしす  
ふぶおのやこのらんはせむくあつむくおきくくおきくくおきくく



二礼ハ下よんのむら  
おのれもくらのこ  
さてるすきき徳ふ  
いごころやくんひら  
お紐とひらひら  
礼とのふらまは  
あつたまのあつた  
ゆき

せいのこもさる

おすまきやち出てこひなを惜こつたお紐のおすがらつ

○アスシテ名ラタナラ名カタツテアイトンガラシサニ心内テ

ハカリホフテムシヤクシヤトシテサモク苦イイ志ラヌレガ

ヤおま下ゆお紐の泥サヒ修サヒり

たちお子のまよれが志のひまあひおれけ

女のとよりおこせたるら

よみんしらす

あまもちひらくが志くさたれおまきて後衣きん

おまひおまうてのう  
たあり

カウヒアアウレ内ニオニカワレカトキダ入ガ若レトヨイト

志死ニダナラ 服ラ看ヨレド 表ハシタ夫婦アナケバ 服キ

ナイガヤガ 親類内ニ誰カ死ダヨツテキルトニテ 服キ

モデアラシク 舞林ひらくことおまあつたらつら

おまあつら。すまひらくことおまあつたらつら

ちらひらくことおまあつら

う

しちぞおれま

おまあつら神のまあちあつたらつら

○ナラトシテ物カヤモシラシテモ子タテモドナラ志死ニダナラ



人めをさるる人目せ  
つらうつらうつらう

カクレサテ泣テをさるる涙テ定テ神カキツクヌルテエリク  
ソシタラヌシヲヌキカカテラニ夜ル并服ス着ヤシテ夜ル  
ライカクタシモ知レナイホトニ

歌一らび  
おちもち

うらみさきこきあはめ多きまへ人のめをのこせむうらびさ  
○ホニニカサモアリクモノヤガ夢ニテ人目ラハカヤウエル  
フナギサワノ

うきうききんせいのあはれももえん夢路をまへ人のめをのこせむ  
○カキリモノイホドヤフコ心ニカセテセテ夢テナリトモセイダシ

テ行テ逢ハクホニニ通スカクツクテ夢ニ通フるテラスハ  
見トカニスナイホトニ

よもや夢あつとこのこねり下す夢路をりさあ  
子行をるるよもやとつらう。こんはつらんこのここの例  
はねおや。

○夢ニロモヤスズニ毎夜ヤイダレテ通テ名く逢テ  
足ルケレドモソレモイツヤヤツトホニニ逢タヤウニナイ  
アノ夢ハヤクニタヌモヤヤ

再撰はあのみゆ  
お〜夢ヲスレ〜  
とてたつらう舟のう  
つらうがれ

ほげまあやせうえ  
とてつもさうら  
濁せありくわんも  
ひん又枕のまき  
まられあつちの  
山の中あれま  
あつちのま  
まのま  
もすのん

トミ人ノ

あつちのまきん

○まじつあつちのまきん

イツハイヤニヨッテ

あつちのまきん

あつちのまきん

○早イ川瀬ノヤニヤルモヤフ

あつちのまきん

クルイラスルツヤ

寛平山付

きのこ

あつちのまきん

○三

あつちのまきん

あつちのまきん

あつちのまきん

歌

つらぬ

あつちのまきん

うんぬん

ほげまあやせうえ

六帖中ハおきかぬ  
 事柄のすむれば  
 あり  
 つつとくまは  
 つまら

○上 ちのちの家へ口が通フエラスニシラスデハナイ

解村のれもきくのほろろ。上の白布あまの匂乃  
 るにハ岸よまハ底とのききと。つとまおハ砂の下  
 とろよあふ上ハまきとススあすあり。は村ハ岸の  
 うへのこのこあ。このこあハあづらす。

○ 昔々乗へつた事柄が夜々寒サニシツクヤウニ口が志心  
 モニシツクヤウニフトニテモ色ガサウカイドヤウニアツキモ  
 色ニカスフデハナイ

よきんぐ

山あかの暮雨れ山のおくあまひびらのききとくろごひめら

○ ナボ志シウアトモ 一ニ音モ人ハサナナララセウカ

アツキツカハナイツナ

此ああまあまれねへのあんす

きんぐのあやが

ろろのほれひらるとききとみらの浦はよとまき

○ 一 おれ昼間が達ガタニ 四 夜は昇日待ツナイ

平らあ

まがまがまが  
 とくまが  
 つまら

あつ川がわがへ  
川の上をゆく

白川のあつ川がわがへ

○人が向ふ方一

心蔵がヤカス

スヤンヤウチニモ人モカクス

あつ川のこつれ

○ナイヤウデ

ツラチガダレテ

カ必多モトガダテ

あつ川がわがへ  
川の上をゆく

あつ川がわがへ  
川の上をゆく

あつ川がわがへ

○ワガバ思ヒラ

コレカレモウ

目ニモカルヤウ

あつ川がわがへ

○磯ハタハ海

存合ニミル

立ッノニカ

あつ川がわがへ

櫓ハ耳ちつきあめ  
あまやうつあま  
てのあれこれく  
ふれあもあれ大方  
あまやうつあま  
とつあま

あまやうつあまモアハヌカイカニシモウイコトヤボトニ  
餘材おまよとこのはつらう一廿六男女の中せうろ  
あまやうつあま中せうろあまやうつあま又餘材船の名の  
さきご用あま

平らな文

櫓より又あまやうつあまあまやうつあまあまやうつあま  
○ワガあまやうつあま櫓ハトウカラモ知ッテ井タフモアアカカ枕ヨリ外  
ニ又ト知ル人モナカツタニ涙ストウモエセキトメイデツイトリ  
ツッテモラレテノケクワイセモイッツイフヲシタフカナ

あまやうつあま  
とつあま

あまやうつあま

あまやうつあまのあまやうつあまあまやうつあまあまやうつあま  
○風が吹テ浪ノウチヨセル岸ノ松ノ根ガアスレルモノヤカワガあま  
モンチモノカシテドウヤラ子ニアスレテ泣キサウニハルドウモ  
コタヘレテサカカウ云々バカリズウエニイカ声ヲアズシタフコ  
哥テス子ニ頭レルト云ニヨツテサ

あまやうつあまのあまやうつあまのあまやうつあまのあまやうつあま  
池子すしあまやうつあまのあまやうつあまのあまやうつあまのあまやうつあま  
○池ニ住テアル鳥ノ底カレルトあまやうつあま水カ浅サエスレテスル

あまやうつあまのあまやうつあま  
あまやうつあまのあまやうつあま  
あまやうつあまのあまやうつあま  
あまやうつあまのあまやうつあま



わたりそのこと  
ありて名のうらま  
とつりまきまき  
祝ひありては備は  
まきまきあり

○オホカクス<sup>カ</sup>モ枕ヨウ知ル上ヲ<sup>ナ</sup>ヤニツテ<sup>ワ</sup>引枕  
ガヘズニ寐タモラ<sup>誰</sup>カア知テ<sup>ウ</sup>キ名ガツト<sup>ウ</sup>エツ  
タ<sup>ナ</sup>ヤヤ<sup>ル</sup>塵<sup>チ</sup>ノ空ハツト<sup>タ</sup>ツモノ<sup>レ</sup>塵<sup>チ</sup>モナイ<sup>ウ</sup>キ名ガ  
止ア

頭書古今和歌集巻第十

古三十九

頭書古今和歌集巻第十

志あり

歌

よき人志あり

うらまはしむる  
のこめりやまはら  
があひあふ人こ  
あまの涙を後  
まありあまのし  
あまのし

こめりやまはらのこめりやまはら人志あり

○上カツ<sup>ニ</sup>コツトカウ<sup>達</sup>ガカリノコ<sup>コ</sup>カライツ<sup>テ</sup>モ志

シウ<sup>志</sup>ウ<sup>ウ</sup>テ<sup>月</sup>日<sup>ヲ</sup>ズル<sup>ト</sup>デア<sup>ラ</sup>ウ<sup>カ</sup>イ

志ありて月日ヲズルトデアライウカイ

○一度モ<sup>達</sup>タ<sup>ガ</sup>ナク<sup>バ</sup>此<sup>ヤ</sup>ウ<sup>ニ</sup>志<sup>シ</sup>イ<sup>モ</sup>アル<sup>イ</sup>ア<sup>タ</sup>ナ<sup>ガ</sup>

ナクバ、ヨソノコトニ志テ居ルガカリナクアラウニトズル、

上六ありく中とま  
ん岸に  
ひものこころふたね  
の山辺那あり中  
たつその中あ  
るるあり

一のち支別集子  
アツム

法るゆき

後承のたごき

いそのこころ中たありくか足んふまるとおもふありや  
○二二ナナカニ度モ逢タガがふか此引ニ意シイト名引カイ  
コリカ六ふフイニ  
○置まふ山モ元ふじヤウウラフデダラシイノモナトガロモオ  
一フトサナイハ逢テモイデモイツモフじんヤウニ意ム  
ガモエス

伊勢

女の身ハハと用  
あつんやまき朝  
てまのつあつて  
くひなまもて  
アツム

アツム  
アツム  
アツム

上六ありあり  
アツム

よむ人あす

あつたふんやまき朝  
○ロシモウヤフ人多モ元上ハシイツ朝境ラ足レモ  
キツヤウとオモカケテハツカシ身オヤニツヤ  
石あゆみおれあつたふんやまき朝境ラ足レモ  
○三ドク又引カヘテ来テは通りキアウイサモ  
ノコリオホイフカナ  
いそのあまのねまきあつたふんやまき朝境ラ足レモ



ひらきとせりあ  
くまぐあまきとれ  
あま

○上ドククムラニ存分ニラツパイ達ルヤウミタイ  
お子々々ハ終食の菜、食の菜あり、魚類と云々、  
兼て曰く、此等おの相子々々と、たゞ終又のこ  
又、ふひびとて。

とらけり

事、あた子、山の上、く、る、え、れ、ご、ま、わ、る、君、中、あ、ら、う、れ  
○カスミタビイテアル山ノ桜花ヲスルヤウデ、又、モ、く、達、モ、  
サテモ、ア、ア、カ、又、君、ガ、ヤ、コ、ト、カ、ナ

ぬるやぶ

ひらきとせりあ  
くまぐあまきとれ  
あま

ん、ご、ご、り、あ、ま、の、と、お、ひ、ぬ、る、ん、ご、ご、り、あ、ま、  
○心トモ人ハナコヲ名フモ、ヤトサ、ル、カ、ウ、テ、達、テ、居、テ、  
ラ、モ、ツ、リ、志、ト、イ、イ、達、テ、居、テ、ガ、ラ、志、カ、ラ、ウ、ス、カ、イ、達、テ、  
居、テ、ハ、志、カ、ラ、ウ、ス、カ、イ、ニ

丸河内、三、法、舟

う、れ、を、ん、持、と、あ、ま、の、つ、く、も、ん、の、お、わ、り、あ、ま、  
○夏、ダ、ゲ、ル、草、モ、冬、ハ、ノ、ス、ス、枯、レ、モ、ガ、ガ、ワ、ガ、フ、人、モ、今、  
コ、ソ、レ、後、ニ、カ、テ、<sup>ト</sup>イ、テ、シ、ウ、ニ、ア、ラ、ウ、ニ、サ、ウ、<sup>カ</sup>フ、バ、カ、テ、  
ン、モ、ス、サ、モ、く、夏、子、ヤ、ウ、ニ、添、フ、ル、ル、コ、ナ

あゝ人のいづくか  
あゝきのふれおひ  
あゝのぬまあゝと  
あゝとれとと  
あゝてんかあゝ  
あゝのつめあゝ

よき人

飛鳥川やちの瀬あゝ世あゝともおひあゝてんかあゝ  
○アスカ川の瀬あゝヨシカスル上云テ世間人心も千物やと  
千ヤガタト云々十世中や上モ口六下モあゝとテアサウ  
イッテモ忘ルハス  
寛平の附まきよのまはるあゝのう

あゝてんかのまのま林あゝもももあゝあゝあゝ  
○シノタイ木も草も秋色がカルモヤガ秋ラヨテモ色  
カラモハロガホヘラ名上云此詩ガカテカナアワ  
何カ

ルト云テモ此ラガ河ガカリカリハセヌ  
おぼろ

影

あゝてんかあゝてんかあゝてんかあゝてんかあゝ  
今夜モ帯ヲイテアテ上ヘキルモノ片方ヲキテ家ヲ待テ

居テカヤラウ宇治橋樵ガサ おぼろの涙

又さうぢのたまひめ

あゝてんかあゝてんかあゝてんかあゝてんかあゝ  
○君ガクルデアワカロガ行ウカトニブラク又合セテ居タテ居

あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ  
あゝてんかあゝてんかあゝ





上の序のまき  
 八太郎の地名まき  
 一のちわいめ  
 日本のおまき  
 一と唐とつづけ  
 一と  
 まきあの大わら  
 一と一と一と一と  
 一と一と一と一と

清くゆき

まき一のやまふわぬぬき一もすてまき一あれ  
 ○上 ドがイナシニ又イナシニタイノヤ  
 ぬくやぶ

まき一と誰あつたん一とあんまぬまき一あつたん  
 ○まき一と名六 名ガツタフガヤラソニナリドイ名ラ  
 イウヨリハナガナニ 死スルサスクニミタカヨイワ  
 キツク名ニ  
 ウ名トキニ死スルヤウナサテ  
 一と一と一と一と

上の序のまき  
 八太郎の地名まき  
 一のちわいめ  
 日本のおまき  
 一と唐とつづけ  
 一と  
 まきあの大わら  
 一と一と一と一と  
 一と一と一と一と

まき一と誰あつたん一とあんまぬまき一あつたん  
 ○上 ドがイナシニ又イナシニタイノヤ  
 ぬくやぶ

まき一と名六 名ガツタフガヤラソニナリドイ名ラ  
 イウヨリハナガナニ 死スルサスクニミタカヨイワ  
 キツク名ニ  
 ウ名トキニ死スルヤウナサテ  
 一と一と一と一と

ひき辨 八の四日  
ききき 今の所  
あつきとよあや  
これあや 持るハ  
ひきとよあや 冠  
辨ありつらぶら  
ら

ンチカミオサトホノケモヌナバタトヒイカガタ上テモ  
コトスナイワヤ

持るひきのつらまはひまらやゆらんよとのまぐん

○一 未スハツニガヒガミヌスニ名が立テイロトウ弁カシ

ガウチテアラシ

はらわらうんはるのまぐれあはるのまぐれ

ひらるとあやす

及引のまびきの系とらうらととまがくとま宛んとあや

○冬ト世間ウ弁ハドヤウミシガクガリケセウトモ

二二 イツデ

モワシラ絶<sup>ト</sup>トヨ<sup>ト</sup>サリマテ

うらととまきつづきまぐれまきまぐれまきまぐれ

此のまぐれまきまぐれまきまぐれ

里人のとハ及辨のまぐれまきまぐれまきまぐれ

○人ウ弁ラバガツテ 君トホイテイカ 在野デノ弁人冬ト

夏辨多ホトダクモオガ逢ズ居ヤカ コカラ上テモ人

スニオクニイ 辨材の流るるハ 辨まきまぐれ

夏系 敏行 朝臣のあつひは 此朝臣の家あつひ女

ヤ未ひあつひとらうらととまぐれまきまぐれ

とらうらとと

及辨のまきまぐれ  
がく人のまきまぐれ  
とら



能く其まきまき  
子川の瀬せまひ  
あまて大ゆきあり  
とんやまきん

あまの女のありひるれ朝霞とささるるささるるあり  
きんとあひてまきそつりりり

よまきん

大ぬさのひくてもあまふありぬきぬきでえそをねあうるれ  
○後時天麻<sup>アサ</sup>ラエタリ人が手手ニ到リウニオニ近イヨロカ  
方カラヒツル所がまきまきタキバ 名トスルケレロトハオモオ  
ニハラねミハサチオモイナ

え

ありひるれ朝霞

おあまきとあまきそをれ流れてもつひまきまきありそおあ

○サロハソシ三列ノ人が多イ大又サヤト名ヨソタテレ名レ  
ソ大又サハ川流レテハタケド <sup>ふよ</sup>ドコシテ流レテ見所ノ遊ハアルト  
云ニアニリソヤウニ大又サヤノト云テ下サルヲワレヤトテ  
ホテトクデヨル所がサウニサソヨル所オニヨリ外ニアロカイノ

歌々

よまきん

○スウ浦ノエノ塩ヲヤク烟ガ風ノツヨサキノ方ハホイテイクヤサ  
ニワガスラスモ名トモヨラヌノ方ハホイテイタワイノ  
あまきとあまきそありぬきぬきあまきとあまきそありぬきぬき

万葉集の巻の  
塩やうき風と  
こたらふわやう山  
子うきしよまきん  
あまきとあまきそ  
あまきとあまきそ  
あまきとあまきそ  
あまきとあまきそ  
あまきとあまきそ



ふらふらとあつた

夜に打探すまは  
夜遊するもつたり

○オハテヤカクランヤ朱へモ此木へハカクランヤアキコチト  
トナリ所が方々ニテ夕夕バ口がカラタキナサライテモツタエ  
心ガナクウレイトモナイ

○夜中ニテ時鳥ガツイコチヤ 鳴声ガス イモトニ里ハドコ里  
カシラカソソリヌ今夜ハ上ルラニ夜闌ニテ ムカシイコチノ  
庭ニ露ヲトミ元アソコニテ井テナク声ガヤ  
これハたゞ時鳥ノ声アラスト入ルハ誤ルベシ 意ハ  
スルコトヲおねとまきすまといふとて 笑スルコト 然ラズ

古井ノナ

つまはるははつたかき

とらふこのむき  
紙ナヌヌ又これと  
つててあのをほれ  
ううとていふあり

意のそまほし〜とあるはとあり 昔をたづねよる友の言と  
〜と作ををり〜とまほしの言をせり。

○イヤモウ人よモハ <sup>チ</sup>只ツカリナモノヤ 三ウツリヌイハロ

ハキツイキカヒナサ

○誰デモロデハ <sup>シ</sup>嬉シイフヲステクルケド 皆ウツテ 子カラオミニ

ホドウレイトテアラウツ



うらせむ 現勢あり  
世の今に冠群に

うらせむ 現勢あり  
世の今に冠群に

うらせむのよれ人とのあざれはむらぬあめつむあづるあ

○一 世間人々ウツガカドゴロロ忘レハセヌカラ オウカライホク  
カテライト必ル、又人ヲスレセヌカラ オツカライホクゴテアライ  
ト必ル、

あづるあめつむあづるあめつむあづるあめつむあづるあ  
○ ぬ中ナラカヒニアキノヌキナハナレテハウツガヤ ドウシテモ  
クシウナバアキノクナラヒバセメテ今ハカヒニアカヌココロナリヒ  
後々もヒビシグナシテヤ ハヤキカキテカラハナレテハ何ニモヒビ  
シグナモナイワナテ 海村はるまじくこの流石なり

古事記ノ十二

日影まゝんとあめつむあづるあめつむあづるあ

○ コチ名ヲヤウモナイ人ヲ名ヲテハヤウニ心ヲ昔トシヨリハ ワスレシ  
ニハダト必ルハ又トヤシボソウウツテ 今デヨリハナホキウツカナレ  
カウラフカツカラシテ <sup>オガ</sup>ヤアハヤウニカナレウテハ上モワスレシ  
ニハルノデナイ <sub>子林ニトリバ  
ニの白ハツグ</sub>

わかれ形んあづるあづるあづるあづるあづるあづるあ  
○ ワスレシニハウト必ルカ必ズオレテ恨ム事 時をノ秋ニナラヌサキニ  
早ウドコカイデシウヤウニオシモ人ノ秋風ニアウトハ必ルハ  
子林ニの白ハツグ  
ニの白ハツグ

このちを補其  
今ノ女のあつる  
アハハハハハハ  
久人セシムツキ  
うらせむあづるあ  
日影





はるの家の  
えんらふ  
おそく  
てま

わぬのすむ里れもふあ

○海田ノエミヌ里ノ業内者ニヨシ浦ヲヌヤウトハ云ハズクナレ

ワシンテ浦業内者デモナイニドウ云フテウラミヲスウ

ラミヲヌウバツカリヒタモノクイフヤラ

あまつけのやむね

そこの日の影もあはる

○ソラノクモツタ日ニ入影ノクモモ又ヌヤウナモテソレト目ニヌエコ

ソセチワクモニヤセホシテハヤウニ教ヤウニナルホドヌフナレ

ハ人影ノ身ヲナヌヤウニ心ビヤウナウヌフ身ヲナレセヌ

古

はるのやま

色もあましん

○色アルモノチズゴソウウテタリモモウを人色ハナイモ

ナバソ色モノイロガガカスミミコダカスイデモカハシ

トハハレヌ

まこころ

めげうきん

○又トウアハヌツラシイ人ハウトテヤラサウシモセヌニワカ下紐ガ

コブコバヌツラシイ

子林ニ  
即下紐

このまはりの  
まはりの  
やまの

あま

こ

かびろふふれあ  
ぬきとまん冠あり

大船中をききまう  
ちてききかきまう  
うの舟は入るの相  
針あり

この舟は舟中  
がく入る女  
ひききくありとわ  
りまのひかりを  
子おきまうはれハ  
枕の座を下しまの  
かみかきまう  
その上ウチ座も  
おきまう  
へまきまう  
まの葉も日

かびろふのそれうあまうと船のやうんきハ袖ぎぬまけあ

○一 サウカサデハナイカモウスレタラ井ガヤ サテモく 三冬

ウアハナダスラバ イゼンノガヒダサレテ 涙ガサボヒル

四の白六作あて 歌服本子やうんきハとあまうとまう

○こ林三其集のふれづみをまや  
うく 語のこみと子と修り

あうえとぐたあて 舟こぎまう日ぐんや 志海うあん

○ 堀江ヲ往来スル小船ノイクルモ日川筋ヲネリ下リスヤウニ

ワニニカ方日じんラ 又多モ下リク 成ヤウニツテコヒシタウフ

ヤラ

十四世ノ十六

馬口

伊勢

わづらもあれゆきと今まふとくが袖や 海とくたふん

○ 口が床へ久しウチタタミヲ下達テ寝タリモナイユエ カナシサ

ニ涙ハ海ガデソ海アレルヤウニアレテニウタ床ガヤニ久シアリテ

又今サラ ソ人ニ達フヤ上テ ソ床ノモツタ塵ヲ 袖テラウタナラ

海(赤ノウチヤウニワガ袖ガ涙ニウタアラウ

つらげま

ソウノ子程まうとらうとこひきまてとあめのひままフセウ

○ 会モヤツリ昔ミユカッテニカノ人がまレイサテモく物ヌレ





を院へ春日の北島  
 左東芝丸殿 六左衛門  
 能有家也この夜  
 辰ハ夕陽天會との字  
 みし強鋼をあり  
 おのづかのうへあり  
 かおまゝに仁徳記  
 子諺向有海人取目  
 已物以注マ

只

を院のおあひまうちる

合をてえすとのひのひおまきくおのづかのうへ形見とゆえん

○モウト云テカニオキレタはあヲヒヨクテトツノオイテモト自合ノ

物ナガラモヤタノ形見ギヤトあマテ又ニセウカイ

強くは あまうれ朝長

玉がそのあつねあもまどいあん人がさかともあまうれあん

○オハ合ズ 毎夜少通ヒサレ野ガ外ニルギヤガタノ今夜

コハ出下サレハ定テ道ヲトリチガナサツタテエリウケヤ

ケレトアウトモ あまう イツテモヨロシヤウエドウゾラトリチガテ

一苗田ノ丈

○出下サレヨカリネソトヲ入人へ出下九合モ 實ニ

シガ所へ出下サレタカト合ニモウサテ

あまうれ

まていおぬてもあまうれあひてゆく節の星をれあ人のうを播

○アトドラトヤスカラハヨロト上ツテオインテ下サレカシロレテジ

ヤトリイソハアトツカトイナシハサテモイキコエニセヌカウレテ

アモキツテイナシハアオノ馬ノ足ヲツカレテコテハシテ

クレイ門ノ前ノ溝ノ橋ヨリヤ 子秋三條のそくまヨリヤと  
り初とささくれとあり

一まるあまうれあまうれ  
 此の船階の歌あり

初摺八人の家にお  
 の川さかあねまて  
 初のとまうし相ま  
 てらまうるあま  
 あり

其の朝は雨未<sup>未</sup>来  
 其の男はのち<sup>の</sup>来  
 其の女は<sup>の</sup>来  
 其の女は<sup>の</sup>来

中納言源のむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

おまごやけつる

閑院

お板のゆつたるあまのむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

○口が身もお板のゆつたるあまのむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

へつを江の海にサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレ

来サレサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレサレ

歌

伊勢

あまのむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

○故郷コソアテテ見ユルモノナレ

口が身もお板のゆつたるあまのむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

寵

山づらのうきあまのむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

○上

ニテハ子カラコトツテモナイ

上

大なるあまのむすね朝臣のあまのすけ子侍等とま

其の朝は雨未<sup>未</sup>来  
 其の男はのち<sup>の</sup>来  
 其の女は<sup>の</sup>来  
 其の女は<sup>の</sup>来

其の朝は雨未<sup>未</sup>来  
 其の男はのち<sup>の</sup>来  
 其の女は<sup>の</sup>来  
 其の女は<sup>の</sup>来

とりのおのぶら  
まじりて

○ 雲は鳥イ人形見タイ カタミデモナデモナイニドウ云コト  
まじりてフスビトゴト コヤウナチガレトヤ

よき人まじり

あふまじりてくも雲ハ何人子んくもんのさふまじりて

○ 又上ノテノ形見ノモノモナニセウツヤクニ又おぢヤ コラ

足テモオハ 志シウ名フガ子エカラヤスルコモナイ

おやのおまじりて人のむすめいとのび子あひく

おらひひたるあひくおやのよぶひひまじりて

くもくもまじりておまじりておまじりておまじりて

まじりておまじりて

あふまじりてのあふまじりてのあふまじりてのあふまじりて

○ コノ葉ララコトオカシク云、定メテ逢テノ形見ニ見ヨト

イフ心テコソコガラガコラ見レバオニハフガ名トサレテ涙

ガナレテハ 海ノ浪ニテテ藻屑ノハニ涙ニテ葉カヤイノ

一 葉ニテ

あふまじりてあふまじりてあふまじりてあふまじりて

○ 形見ハサケツク今テモウ ニクイカタキヤワイノ コガナクハ

ヲリニ又ワステ井ルトキモアヲウ物ヲコノ形見ガアルニエテ

涙はありのまじり  
あふまじりてあふ  
まじりてあふまじり  
まじりてあふまじり  
まじりてあふまじり  
まじりてあふまじり

公事考略一巻之モリスレハ

頭書古今和歌集巻第十

古今和歌集

